

日本性科学会 ニュース

第40巻第3号

令和3年(2021年) 9月

発行人: 針間 克己 印刷所: (株) 絢文社

第40回 日本性科学会学術集会

学会テーマ Rainbow after the storm
開催形式 Web 開催
期 日 2021年10月24日(日)
会 長 針間 克己 (はりまメンタルクリニック院長/日本性科学会理事長)
H P <http://jsss40.kenkyuukai.jp/>
参加費 一般8,000円 学生2,000円

学会プログラム

・会長講演「rainbow after the storm」

はりまメンタルクリニック院長 針間 克己

・一般演題

・教育講演

「クラインフェルター症候群: 性分化の非典型性が個別最適化教育への架け橋となる」

東京大学教養学部・大学院総合文化研究科附属 教養教育高度化機構特任准教授 坂口 菊恵

・特別講演 1

「性科学、半世紀の臨床を振り返る」(仮題)

あべメンタルクリニック院長 阿部 輝夫

・特別講演 2

「性科学、半世紀の臨床を振り返る」(仮題)

国立病院機構千葉医療センター非常勤医師 大川 玲子

・シンポジウム「2022年からの ICD-11が示す性の健康のこれから」

「身体的治療の構造化」と「脱精神病理化」 未来に向けて協働するための理解」

関西医科大学助教 織田 裕行

「男性性機能障害のこれから」(仮題)

聖隷浜松病院リプロダクションセンター長・総合性治療科部長 今井 伸

「ICD-11に見る女性性機能不全の変遷」

社会医療法人若竹会つくばセントラル病院産婦人科部長 田中 奈美

Vol. 40

日本性科学会

№.
3

〒113-0033 東京都文京区本郷3-2-3 森島ビル4F
TEL・FAX 03-3868-3853 E-mail office@sexology.jp
URL <https://sexology.jp/>

パラフィリアとパートナー関係

お茶の水女子大学 石丸 径一郎

2021年7月29日に開催された症例研究会では、複数のパラフィリアを持つと考えられる夫との間でセックスレスになっている女性についての症例を検討した。本稿では、パラフィリアとパートナー関係について考察したい。パラフィリアについての研究は少なく、パートナーの視点からの研究はほとんどない。ここではミネソタ大学の臨床心理学者である Brian D. Zamboni 博士による Partner Knowledge and Involvement in Adult Baby/Diaper Lover Behavior. (大人の赤ちゃん／おむつ愛好行動についてのパートナーの知識と関与) という2018年の研究を紹介する。Adult Baby/Diaper Lover (以下ABDLと略記) は、DSM-5のパラフィリア障害の中で独立した疾患単位とはされていないが、日本語でも「赤ちゃんプレイ」といった単語でしばしば描写される性的嗜好である。

ABDL は、類似の表現として、autonepiophilia, paraphilic infantilism, adult baby syndrome などがあり、また性的マゾヒズムの1タイプであることもある。著者は、ABDL コミュニティにおいて研究参加者を募集し、18歳から80歳までの男性1,795名、女性139名の回答者を得た。回答者の性的指向は、男性は異性愛が最も多く(58%)、女性ではバイセクシュアルが最も多かった(43%)。参加者のうち49%が現在パートナーを有していた。そのうち79%が、自分のABDLについてパートナーは知っていると回答した。パートナーとABDLプレイを行うと回答した人と、行わないと回答した人はほぼ半々であった。パートナー以外の人とABDLプレイを行うと回答した人は20%であった。パートナーの参加に関する自由記述には、ポジティブなものもネガティブなものもあった。例えば次のようなものである。「彼女もおむつをするのは好きです。それは義務的なものから楽しみへと変わりました」「パートナーは知っていますが、関心を共有していません。しかし、彼女はとても理解があるので、私がたまにおむつで寝ることは問題ありません。」「最初、彼女は試していましたが、数年前に興味がないと言い出しました。このことは、私たちの性的関係に悪影響を及ぼしています」。パートナー以外とのABDLプレイについての自由記述は次のようなものだった。「私が住んでいるところには(幸運にも)おむつ好きのための有力なソーシャルネットワークがあり、時々おむつパーティーをします」「プロによる“ママ”サービスの利用を考えたことがあるが、法的な問題に巻き込まれたり、免許を失ったり、離婚したりしたくないので我慢している」。著者は結論として、ABDLを持つクライアントに対し、セラピーの中では、自己受容を促すこと、パートナーに早期に伝えること、またパートナーは必ずしもこの嗜好に付き合う必要はないことを推奨している。

この研究では、回答者が当事者のみであり、そのパートナーの回答を直接聞いていないため限界はあるが、パラフィリア的でない「典型的な」性行為ができない、または関心がないためにセックスレスに陥るといった記述は見当たらなかった。しかし、相手の性的嗜好を受け入れられないことから関係自体が悪化することはやはりあるようである。

文献

Zamboni, B. D. (2018). Partner Knowledge and Involvement in Adult Baby/Diaper Lover Behavior. *Journal of Sex and Marital Therapy*, 44 (2), 159-171.

※具体的な症例について検討しあう症例研究会は、プライバシー保護のため、守秘義務のある資格取得者またはセックス・カウンセラー取得者限定で開催しています。参加を希望される方は事務局までご連絡ください。

第50回セックスカウンセリング研修会開催報告

つくばセントラル病院産婦人科 田中 奈美

コロナ禍が長引く中で、昨年に引き続き今回もオンライン開催となりました。50回の節目となった今回は「コロナ時代のセクシュアリティ」というテーマで6名の講師の皆様にお話しいただきました。また「カウンセリングの基礎」として、オンラインでは初の試みとなるグループワークをオンラインミーティングのグループ分け機能を用いて行いました。参加者は123名で、54名(43.9%)の方から終了後のアンケートにご回答いただきました。参加者は会員68.5%、職種は医師35.2%、助産師16.7%、心理職14.8%、看護師9.3%、学生7.4%などでした。

「新型コロナとセックス・マスターベーション調査報告」(古川直子先生)については「何となく感じていたコロナ禍での性生活の変化を具体的データとして示していただき興味深かった」、松岡典子先生の「新型コロナ禍の『妊娠SOS』相談」については「最前線のサポート業務の重みを教えて頂けて良かった」、「オンラインツールを活用した相談支援の取り組みがとても参考になった」との感想をいただきました。「産婦人科医からみた『17.3 about a sex』」(高橋幸子先生)についての感想は「日本のメディアでのセクシュアリティの扱われ方と、それを変えようとした実践について、話していただき参考になった」、「コロナ禍での性感染症の発生動向」(福元和彦先生)については「性感染症の状況変化などためになった」、「『メンズヘルス』についての理解が深まった」などの感想をいただきました。「コロナ禍におけるDVの状況、そして」(山中京子先生)については「学術的な明晰な分析、コロナ禍での問題とコロナ以前からの問題の両方の解説など、勉強になった」、「DVの存在について診療の場でも意識したいと思う」、「セックスでコロナがうつるのか?」(今井伸先生)については「コロナウイルスについて整理していただ

き、さらに性的接触の場面での感染リスクにも詳細にふれていただいていたわかりやすかった」、「たくさんメッセージがあった」などの感想をいただきました。

初の試みのグループワークでは、最初に金子和子先生から「カウンセリングの基礎」についてお話しいただき、丹羽咲江先生・山中京子先生の名演技で「セックス・セラピーの悪い例」について熱演いただきました。その後各グループに分かれ、15分ほどのグループディスカッションを行いました。「オンラインでもこのような形だと充分ディスカッションができるとわかった。今後もこの形式を続けてほしい」、「実際のカウンセリングの様子がイメージできてよかった。もう一例ぐらい事例があるとよかった」とのご意見をいただきました。

全体としては、アンケートの回答からは参加者の満足度も概ね高く、グループワークではオンラインでの参加型の学びの機会について新しい可能性を模索することができました。一方、講義の感想には、「メーカー色が強すぎるので学会としてはどうなのか」、「(特定の)企業から何か報酬を得ているのか?疑問を抱く」、「番組の宣伝のように感じた」との意見もありました。日本性科学会が学術団体として一般企業とどのように関わっていくべきか、どのような情報を発信すべきなのかについても、今後検討する必要を考えさせられました。

今後の研修会の開催形態については、アンケートではハイブリッドも含めてのオンライン形式の開催を希望する方がほとんどでした。個人的には顔を合わせる喜びも捨てがたいと思うのですが、コロナ禍というピンチをチャンスに変えて、今後もより良い研修会のあり方について検討を重ねたいと思います。

第22回 国際性機能学会世界学術総会 (WMSM 2021) 参加のご案内 (The 22nd World Meeting on Sexual Medicine Japan 2021)

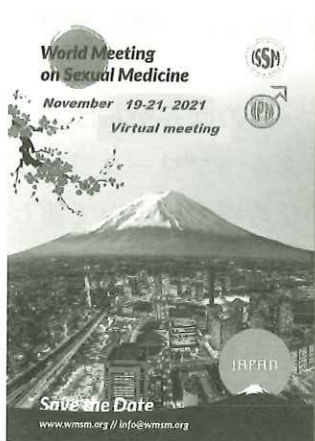
開催形式	Web 開催 (virtual meeting)		
会期	2021年11月19日 (金)～21日 (日) + オンデマンド配信		
会長	永尾光一 (東邦大学大森病院リプロダクションセンター教授)		
併催	第31回日本性機能学会学術総会 / 第30回日本性機能学会東部総会 2021年11月14日 (日)		
学会テーマ	The future of Sexual Health		
H	P	WMSM2021	https://www.wmsm.org/
		日本性機能学会	http://www.congre.co.jp/jssm2021/index.html
登録費	上記HP「WMSH2021」Registration (参加登録) のページをご確認ください		



参加登録サイトへの
QRコード

国際性機能学会を日本で開催することは、日本性機能学会にとって長年の悲願でした。

念願叶って2020年9月16日から19日までの予定で横浜にて開催される予定であった第22回国際性機能学会世界学術総会 (WMSM2020) が、新型コロナウイルスの世界的流行により、やむなく開催延期となって約1年。WMSM2020は WMSM2021として、2021年11月15日 (月)～17日 (水) の日程でパシフィコ横浜にて開催される予定でしたが、終息の兆しの見えない新型コロナ感染の状況を勘案して Hybrid 開催の予定となり、最終的には完全 Web 開催 (virtual meeting) となりました。



さらに、会場の縛りがなくなり平日開催にする必要はなくなったため、開催日が2021年11月19日 (金)～21日 (日) へと参加しやすい週末に変更となりました。ライブ配信に加え、オンデマンド配信も視聴できます。

Web 開催となったことで、国際学会としては格安の登録費となり、併催の日本性機能学会学術集会への参加も可能となります。特に、学生と研修医は超お得、医師以外の職種の先生方にも懐に優しい値段設定となっており、世界最高峰の性機能分野の研究発表に触れることができます。

残念ながら、お楽しみの懇親会やポストツアーはありませんが、オンデマンド配信もありますので、しっかり、じっくり、どっぷり学会を味わい尽くすことができます。この機会に、ぜひ学会への参加をご検討ください。

(文責：聖隷浜松病院 今井 伸)

新幹事あいさつ

北里大学看護学部
西 佳子



この度、新幹事を拝命しました助産師の西佳子です。東京慈恵会医科大学で25年間、臨床助産師、教員として勤務する中で、女性の健康について考えてきました。日本性科学会との出会いは、2009年慈恵大学修士課程のゼミで、茅島江子先生が妊娠期DVやHPVワクチンに関する議論について、話しをしてくださったことです。大会会長であられた塚田攻先生の学術集会に初めて参加した際には、性科学という知らないような学問領域に驚き、足を踏み入れてはならないような気持ちにもなりました。しかし実際の臨床現場を見渡してみますと、骨盤臓器

脱でペッサリー交換に来院する患者さんが多いことや子宮摘出を受ける患者さんが生殖器喪失への戸惑いを手術直前に看護師に吐露することがあり、女性のセクシュアリティに看護師が関わる必要性を感じていました。同時に、医療の中では疾病へのケアがより優勢となり、生活に伴うケアが十分にされていないと感じるようにもなりました。2015年の WAS (The 22nd Congress of the World Association for Sexual Health, Singapore) への参加、ミルトン・ダイヤモンド博士にお会いしたことは、私にとって刺激になりました。子宮摘出後の性機能について調査した報告がございますので、関心がありましたらご一読ください。

今後も、この学会で多くのことを学びながら、多様な性に関心を向けられるよう励んでいきたいと思ひます。どうぞよろしくお願いいたします。